



TITLE:

# 巻頭言 --自分のスタイルをもった研究者に

AUTHOR(S):

佐藤, 卓己

---

CITATION:

佐藤, 卓己. 巻頭言 --自分のスタイルをもった研究者に. 京都メディア史研究年報 2022, 8: 1-4

ISSUE DATE:

2022-04

URL:

[https://doi.org/10.14989/KJMH\\_8\\_1](https://doi.org/10.14989/KJMH_8_1)

RIGHT:

## 巻頭言―自分のスタイルをもった研究者に

佐藤卓己

およそ四十年前、私がまだ学部学生だったころ、「歴史家に最も必要なものは何ですか」と恩師・野田宣雄先生に問うたことがある。先生は一言、こう答えた。

「自分のスタイルをもつことだろうね。」

正確には覚えていないのだが、その言葉の前には

「三〇歳台のうちに」あるいは「四〇歳までに」が冠せられていたような気がする。というのも、その後の会話は当時の若手研究者で誰が魅力的な論文を書いているか、その研究者の月旦評へと続いたからである（存命者も少なくないので、その詳細は控える）。

当時は口に出さなかったけれども、著者と査読者をふくむ数人しか読者のいない論文、およそ読者のこと

など配慮していない文章が「研究成果」の名のもとに量産されている状況への憂いを私も共有していた。いま大学院ゼミで「読まれる博士論文を書いてください」と私が繰り返している理由もそこにある。

野田先生は二〇二〇年一二月末にお亡くなりになった。この一年、私は野田先生の一卷選集『歴史の黄昏』の彼方へ――危機の文明史観』（千倉書房・二〇二一年）を編集しながら、歴史家のスタイル（文体）について考え続けた。私がかつて真似たいと願ったスタイルがそこにあつたからである。

ピーター・ゲイ『歴史の文体』（鈴木利章訳、ミネルヴァ書房・一九七七年）も書庫から取り出して眺め

た。「スタイルは、科学する歴史家の芸術である」の一文で同書は結ばれているが、学生時代の私が鉛筆で印をつけている箇所は、「文体は学ばれうる」と説かれた序章である。長文だが引用しておきたい。

作家といえども、生まれながらの文章家ではない。かれらには、自分が模倣したスタイルへの従属からたえず独立を目指し、自分の肉声を聞き分けようと努めつつ、自分の型をつくり上げてゆくのである。普通、かけ出しの作家は、——他の分野と同様、ここでも歴史家は、作家と同一行動をとる——模倣するに足るスタイルを、先ず真似ることからはじめ、次いで、そこから離れることで自分に合ったスタイルを見つけゆくのである。模倣こそ、自己発見の過程における、どうしても通過しなければならない第一階梯のように思われる。したがって、初めから叙述は、完全に、心の底から出たものではない。つまり、その大部分は、自分が模倣した本から直接に出てきたものである。そ

の日本人の独自のものが大きくはばたくのは、後になってからであり、苦勞の賜物というべく、しかもその文面には、苦勞のあとがみえないのである。

スタイルとは学ばれ得るものなりというが、実はそれだけではやや正確さを欠く。むしろスタイルとは学ばれねばならぬものといった方がより正確である。ごく一部であろうが、生まれつきの才能というものもある。しかし、それを越えて重要なのは、意志力と知性の錬磨の結果である。表現力の豊かさに、感謝の言葉を呈するとすれば、それは鍛錬に關してである。

選集の編集を終えた後、私は「私」への懷疑に耐えた文明史家——我が師・野田宣雄を回想して」（『アステイオン』第九五号・二〇二二年）を書いた。その末尾では野田先生が同僚・高坂正堯教授の追悼のために同じ雑誌に寄せた「諦念を秘めた華麗な文明——追悼・高坂正堯氏」（『アステイオン』第四二号・一九九六年）から引用している。野田先生は高坂教授を「華麗な文明」と

評しているが、人物や書物への評言とは究極において評者自身を映す鏡である。以下の文章の「(高坂) 氏」を「私(野田)」と置き換えても、意味は通じる。

後に残った者が氏の業績から学ぶべきことは、政治学や歴史学といった学問においても、最後にものをいうのは研究者自身の個性なのだ、ということである。そして、たとえ高坂氏ほどの才能と個性に恵まれていなくとも、われわれはそれを自覚し、できるだけ自分の個性的なスタイルを展開するように心がけるべきである。教をたのむ「体制」や「学派」の蔭に隠れて、自分の才能と個性の貧困を偽ろうとすることほど、高坂氏の精神から遠いことはない。

これを執筆された時期、真宗大谷派の僧侶でもある先生は「親鸞は弟子一人ももたず候」(歎異抄)とよく口にされた。先生は長らく教養部の教授だったので、「制度上のゼミ生」がいたのは法学部に異動されて以後の五年間に過ぎない。実際、私自身も文学部・

文学研究科の学生だったので、制度上で先生との関係はないに等しい。むしろ、そうした「自ら選んだ」関係こそ私には居心地がよかった。私はいま本号の特集「メディア政治家」研究のために池崎忠孝の足跡を調べているのだが、東京帝国大学法科大学の学生である池崎が、大学にはほとんど行かず赤木桁平の名前で漱石山房に入りびたっていたようなものかもしれない。

今回、『歴史の文体』の第四章「ブルクハルト―真理を宣べる詩人」を再読して、「親鸞は弟子一人ももたず候」に込められた真意がようやくわかったような気がした。ちなみに、私は野田宣雄『歴史をいかに学ぶか―ブルクハルトを現代に読む』(PHP新書・二〇〇〇年)を、柏書房のwebマガジン「絶版本」で「よみがえる名著」として論じている。先生がブルクハルトを歴史家の鏡と見ていた以上、ピーター・ゲイがブルクハルトについて次のように書いていることも十分に知った上での発言だったのだろう。

個々人の仕事を通してのみ、歴史はその力を、コンソール「癒し／悦楽」にまで高められるのである。そしてブルクハルトが賛美した文化的英雄と同じ様に、かれもまた矯正できないほどの徹底した個人主義者であった。「私は学派なんぞ創りませんよ」(Ich werde nie eine Schule

Studenten)とは、かれがもつとも円熟した時期に友人パウエル・ハイゼに書き送った手紙であった。かれは、この言葉をなげきの積りで言ったのだが、現在から振り返ってみた場合、この言葉は、なげきどころか、ブルクハルトの確固たる不死への自信としてとれないこともないのである。

いずれにせよ、「自分の才能と個性」をスタイルにまで高めることができるのは、「個々人の仕事」だけである。私が野田先生から受け取った言葉を、私はそのままゼミ生に残したい。

「四〇歳までに自分のスタイルをもちなさい」。

そのために必要なのは書き続けることであり、二〇〇歳代で博士論文に続く二冊目、三冊目を仕上げること

である。本号に掲載された書評ではそうしたゼミナリストの成果が何冊か取り上げられている。よろこばしい限りというべきだろう。(了)